傷が浅いうちに

ukaze

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
傷が浅いうちに

【Ｎコード】
Ｎ４１４５Ｍ

【作者名】
ｕｋａｚｅ

【あらすじ】
短編
フラれた少女の一晩

フラれた。
走っていたのはその所為だと思う。ずっと走っていた所為で息は上がり、周りの景色は見慣れないものになっていた。夜ご飯の時間はとうに過ぎていて、運動し続けていた体はエネルギーの摂取を求めてくる。
冬の夜、とても寒いはずなのに涙ともに汗が流れ、吐く息はいつもより少しばかり白みを増しているような気がした。白い吐息が結晶したような雪が降り続け、私にぶつかっては消えていく。
外は真っ暗で、私の走る道には誰もいない。まるで、世界が私を拒絶してるみたいだ。誰もいないほうが泣き顔を誰にも見られなくて済む。
今日はどうしようかな。もう、門限過ぎちゃったし、家には帰れないな。友達に迷惑かけたくないしなぁ。公園で野宿かな。それもいいと思う。近所の迷惑にならない程度になら、声を上げてもいいよね。でも今、冬なんだよね。今も綺麗な雪、降ってるし。凍え死ぬかも。これも運命かもしれない。
決めた。今夜は公園で野宿。明日は、明け方帰って学校行こ。親は朝早いから多分家にはいないと思う。
じゃあ、公園探して家にメール送っておこう。
色々考えたら少し気分が晴れたような気がする。空はまだ、雪を生産し続けてるけど。

なかなか公園が見つからなくて、とても家から遠い場所にお泊りすることにしました。
探してる間に涙は枯れ果てたみたいで、公園到着時には、もう涙は流れていなかった。
ケータイのディスプレイを見ると、もう昨日から明日になってい

た。にぎったケータイは外の気温に同調しているようで、にぎる手に冷たさよりも痛さを送り込んでくる。外灯は少なくケータイの光は公園内ではひとつの大きな光源となっていた。今はケータイに親からのメールが帰ってこないかが心配でおびえています。

そこそこ広い公園内は、当然静まり返っている。今頃になって、不審者とかが心配になってきた。

どこで寝ようかな？　と遊具を見渡す。見当たるのは、すべり台、ブランコ、シーソー、ウンテイ、砂場、などなど。ちょうど、すべり台の下がトンネルみたいになっていたのでそこで寝ようかと思います。そうと決まれば歩いてすべり台へ向かう。歩く以外には特に無いけど。

「あれ？　お姉さんもしかして滑り台で寝ようとしてる？」

！！　いきなり後ろから声をかけられた。自分の肩が激しくはねたのがわかった。「誰！？」と声にしようとしたけど動揺して口が動かない。ヤバイ、想定していた不審者かな。切り抜ける方法なんて考えてなかった。大声を出す？　全力で逃げる？　殴り倒す？　どれも失敗しそうでならない。想像以上に自分が戦慄していることに気がついた。体、うまく動かないかも。

「あっ、僕は不審者とかじゃないから。そんな停止しないで」

「不審者の言うことなんて信用できるか！」

あれ、今度は声に出た。どうしよう、体の停止は少し解けたけど状況は変わらない。このまま止まっているわけにもいかない。とりあえず、逃げよう。足を動かせ。

「ちょっと、お姉さん逃げようとしてるでしょう？　なんなら、夜ご飯でもどうって聞きたかっただけなのに」

思わず足が止まる。夜ご飯！？　すばらしい響きだけど騙されちゃだめだよ私。こうして、気を引きとめて……もう、いいか。なんか考えるのが嫌になってきた。フラれた後だからなのか知らないけど優しさに弱くなってるみたい。ゲームで言うと弱点は優しさですって感じ？　効果抜群です。もういいの、フラれて自分は彼に

とって不必要な子だってわかったから。帰れなくてもいいや、一晩だけ私を許してねみんな。心配してくれるならごめん。
覚悟を決めて振り向く。……うわ、外灯の明かりで程よく照らされたイケメンが一人、私の視界に入った。年は私と同じくらいだすると高校生かな。何人も女の子騙してそうだな。私もそうなるのかな？
最初は、意外そうな顔をしていたイケメン君はすぐ破顔し嬉しそうにしゃべりかけてくる。
「あはは、やっとこっち向いてくれた。お姉さんは何？　この公園で野宿？　それとも、僕に合いに来たわけじゃないだろうから、なんだろうね」
終始楽しそうな顔を絶やさないイケメン君は、「そこ座ろうか？」と近場にあるベンチを指差す。私はそれを受け入れ軽く首肯し、二人で並んでベンチに座る。こんなシーンは彼との間で起きてほしかった。こんなこと考えてもしょうがないけど。
「家出です。ちょっと色々あって」
さっきの返答を曖昧に答える。満足してくれるかな。
「へぇ、そう。目、少し腫れぼったいね、泣いてたりした？」
痛いところを突かれる。とても答えづらい。どうでしょう。効果抜群なので答えてみる。
「フラれてネ、ずっと泣いてた」
えへへ、とおどけてみる。ホントはまた泣きそう。
「そっか……フフ、お姉さんみたいな可愛い子をフるなんて見る目が無かったねその彼」
「定型句みたいな慰め言葉だね。まぁ、いいか。ところでお兄さんはこの公園で何してるの？」
気になるところを私も突っ込んでみた。イケメン君はバツの悪そうな顔をして少し思案顔。そういう顔も絵になるなって不躾にも横顔をじろじろ観賞する。その視線に気がついたのかはわからないけれどイケメン君はこっちを向いてはにかみ、さっきの質問に答えた。

「ハハ、お兄さんかこっちがお姉さんって呼んでるのに。うん、いいけど。僕はねホームレスですよ。すべり台、僕の寝床なの。ところでさ、コンビニで買ってきたやつだけどパン食べる？」
そう言って、イケメン君は袋に包装されたメロンパンを差し出してくる。予想の範囲内の回答でした。不審者ではないみたいでよかった。
それよりもパン。パンが食べたい。手を伸ばしてメロンパンをキャッチする。「ありがと」と小さくお礼を述べて開封させてもらう。甘ったるい香りが袋の中から漂い、鼻を伝って目に到達して涙腺が緩んだような気がして、涙が出そうなのをこらえた。一口、二口とかじる。甘い。私の嫌いなパンなのに何故かこらえたはずの涙があふれて泣いていた。
「お姉さん、体冷やさないうちに帰ったほうがいいよ。なんなら送ろうか？　夜道危ないし」
「……っ、……うん」
ぐちゃぐちゃに何がなんだかよくわからなくなって、うなずいた。また泣いたらすっきりした。もう泣かないから。雪はいつのまにかやんでいて、私の心を体現しているみたいだった。
「じゃあ、行こうか」
ホントはもっとここにいたかったけど、もう大丈夫かな。イケメン君は立ち上がって手を差し伸べてくる。一挙一動がいちいち格好いいんだよって思う。簡単に惚れることはできないと思うけど。

帰り道はずっと話し続けた。笑ったり、少し怒ったりした。感情をたくさん表に出した。
家に着くころには明け方になっていて、でも親はまだ出勤していないようで車が残っていた。
「ヤバ、親まだ家にいるし怒鳴られそうだよ」
「怒鳴られてくれれば？　お姉さんならしっかり切り替えができてると思うから、逃げないでけじめをつけたほうがいいんじゃないの？」

「簡単に言ってくれるね、私は昨日フラれてまだ傷心なんだよ」
「じゃ、僕はこれで明日からちゃんと学校、登校しなよお姉さん」
「ちょ、逃げるなぁ～私を一人にしないで」
「ハハ、そうしたいけど僕も寝たいし」
「そうだね、ゴメンいろいろありがと」
「たいしたことしてないでしょ僕」
「ううん、助かった。またね」
「また会ってくれる気あるんだ。うれしいな」
「うぅ、じゃ、じゃあね、バイバイ」
「うん、おやすみ」
イケメン君が視界からいなくなるまでずっと手を振り続けた。これで次の恋へ進めるかな？
ふぅ、じゃあ怒られにいこーかな。今日は寝不足と泣いた所為で目が大惨事だなぁ。
怒鳴られて、今回は一区切り。
私はまだ見ぬ、次の恋に向かって順調に進んでいるようだ。

（後書き）

はじめまして、ｕｋａｚｅといいます。
短編です。
習作です。起承転結意識しました。
少しばかり短いですが。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4145m/

傷が浅いうちに

2010年10月8日14時26分発行